

# 真踊の構造と技法

横 道 萬里雄

## ① 琉球古典芸能の種目と流派

琉球の古典芸能には、琉球王朝期の伝統を受け継ぐ純古典種目と、明治以後に興隆して様式の定着をみた新古典種目とがある。演劇では、組踊（クミウドゥイ）が前者、歌劇（カゲキ）が後者に当たる。舞踊では、前者を真踊（マウドゥイ）、後者を雑踊（ゾーウドゥイ・ゾーオドリ）と称する。真踊と雑踊は、同じ舞踊家によって演じられているが、足の運びその他の技法に違いがある。

琉球の古典舞踊で、流派や家元を唱え出したのは、第二次世界大戦以後のことで、本土の舞踊界をまねたものである。能の流派のような技法上の差があるわけではない。

## ② 琉歌の形式と琉謡の詞章

真踊の地謡（ジウタ・ジウテー）である歌三線（ウタサンシン）の詞章は、八・八・八・六の琉歌形式をとるものが大部分である。これに部分的な反復を加えたり、ハヤシと称する囃子言葉を挟んだりして、歌って行くのである。次に、『かじゃでい風』の踊りに用いる歌三線曲の「かじゃでい風節」の詞章に、反復とハヤシを加えて掲げる。片仮名がハヤシの部分である。

きゆぬ ふくらしやや なうに じやなたてイ  
 今日（けふ）の誇（ほ）らしやや 何（なに）に じやな 譬（たと）え  
 ついぶでイウ はなぬ ついゆ ちやた ぐとウ  
 窄（せま）で居（い）る花（はな）の 露（つゆ）行（い）逢（あ）た如（ごと）く（ヨシナ）

（ハリ）（窄で居る花の 窄で居る花の  
 露行逢た如）（ヨシナ）

歌三線では、同じ曲がしばしば別の詞章で歌われる。若衆踊の『特牛節（クティブシ）』と女踊の『女特牛節』は、同じ「特牛節」の曲で踊られるが、前者の詞章は、「常磐なる松の、変る事無さみ……」であり、後者の詞章は、「御慈悲ある故ど、御万人のまじり……」である。こうした場合、詞章反復の形式とハヤシの加え方は、詞章の変更と無関係である。（これらについては、岩波講座『日本の音楽・アジアの音楽』第五巻所収の拙稿「古典琉球芸能研究序説」を参照されたい。）

## ③ 真踊の構造

真踊の演日の中で形式の整ったものは、出端（ンジファ）・中踊（ナカウドゥイ）・入端（イリファ）の三部分から成り立っている。出端と入端が、下手裏と上手表を結ぶ対角線を基準にして踊られるのに対し、中踊は、正面を切って踊られる。女踊の大曲『諸鈍（シュドゥン）』では、出端は静か

めな「仲間節」の曲で踊られ、中踊は極めて緩徐な「諸鈍節」で、入端はややテンポの速い「しょんがね節」で踊られるというぐあいである。

## ④ 真踊の技法と所作単元

舞楽や能や古典バレエは、特定の所作単元の積み重ねで成り立っている。そして個々の所作単元に特定の名称が付けられているので、それを言い連らね書き連らねることで、舞踊の構造を説明できる。琉球舞踊も、同様に所作単元の積み重ねで成り立っているが、名称の数がごく少ない。しかし、所作単元の存在への認識ははっきりしているの、それぞれの単元に名称を与えさえすれば、同様に扱うことができる。

試みに『かじゃでい風』と『特牛節』の始めの部分の舞踊構造を、単元名で書き連らねてみると、次のようになる。頭に・印を付けたものは、新名称である。

かじゃでい風 特牛節  
 これを見ると、両演日の冒頭部分の所作が全く

歌持テ出 裏テ正向キ 構エ立チ	笛、太鼓ヲ出 歌持テ正向キ 構エ立チ
・繰コミ 正へ出 右ツキ ・シトメ	歌持二回目テ腰沈メ 扇広ゲ ・シトメ
切返シ 裏へ行キ 右へトッテ正向キ年	・繰コミ 正へ出 右ツキ ・シトメ
・シトメ	切返シ 裏へ行キ 右へトッテ正向キ年
・サユウ（上表へ三足出 左ツキ）右足打	右へ外シテ扇ツマミ左へ一足出テ左ツキ年
チ逆所作（下表へ三足出 右ツキ）左足打チ	扇上ヨリオロシ 右へ一足出テ左ツキ年
・扇カツギ 左へトッテ裏へ行キ	扇上ヨリオロシ 正へ一足出テ左ツキ年
左へトッテ正向キ年シトメ（以下略）	・扇カツギ、スグオロシ（以下略）

同じであることとか、シトメによる段落の置きかたとか、舞踊の構造を一見して捉えることができる。（なお『沖縄芸能の科学』第二号所収の拙稿「古典琉球舞踊譜の試み」を参照されたい。）

## ⑤ 真踊の詞章と表意

真踊の所作は、詞章の内容を表現するように作舞されている。『かじゃでい風』のような純粹の祝儀曲は例外だが、それでも、三回目の「窄で居る花の」でする払イ手は、花の開く感じでやるのだと言う人があるほどである。女踊などでは、特に表意が大切である。それも、単語の意味につく所作というだけでなしに、その役の心根の表現が重要である。例えば『諸鈍』の「月や入下がて」で月見手をして見上げるが、ただ月を見るというのでなしに、ひとり寝の女の心がにじみ出なければ、成功とは言えない。

\* 1988年度秋季第26回舞踊学会  
 『舞踊學』第12号別冊より転載